

いたりします。人の運命を根底から覆すことは戦争の掟です。

私も八十歳まで生き延びました。戦争の生証人として二度と戦争の無きを念じ、子孫にあの同じ苦しみを味あわせたく無いと思いながら、散華された沢山の英霊が泰らかに眠られるよう御祈念申し上げます。

### 関特演下番・

#### 沖繩宮古島の軍務

神奈川県 下村 熊之助

私は東京東駒形に、両親の元に姉二人との五人の家庭に生まれました。出生時の産声が弱かったため、強くなれと「熊之助」と命名されたのとことです。親爺は苦勞人でよく働いたそうです。昔から言う江戸っ子気質で宵越しの金は持たねえ「チャキチャキ」の隅田川育ちの男でした。このため母親が経済的には苦勞したと思っていました。あの頃は日本国中経済不況で「暗黒の時代」でした。でも思い出には苦はなく楽しい事のみあります。亀戸天神の祭礼とか隅田川の花火など。一般庶民としては、政治とか軍部の跋扈、胎動とかには致し方ないことと生きていたのでしょう。

小学校を卒業して高等科二年を修了しました。昭和十（一九三五）年四月より、東京貯金局に就

職、勤務しました。旧制中等教育の市立夜間商業学校四力年を修了、卒業しました。

昭和十五年七月某日、徴兵検査の通告がありました。兵事係の談によると、昨年までは甲、乙、丙、丁種の四段階だったが、昭和十五年度徴集からはこれが細分科されて、乙種は三種まで、丙種は合格で、丁種が不合格ですと、「以上念の為に」と申されました。要するに「身体障害者以外全員合格」で、兵隊として利用できるように軍部の力が法政上に圧迫を加えたのでしょう。私は名は熊之助ですが、蒲柳ほりゅうの質で、少々筋骨薄弱でした。当日執行官から「下村熊之助、第三乙種合格」との宣言を下されました。旬日を経ずして、第二乙種（編入）合格の通知がありました。

昭和十六年七月、役所から吏員が来て「お目出度う御座います。熊之助さん召集令状です」と渡されました。入隊は東京六本木の歩兵第三連隊の前にあった東部歩兵第六部隊でした。同隊で軍装

を整え兵隊としては西も東も不案内でしたが、ただ隊伍を組んで即出陣でした。どこへ連行させられるか一切不明でした。

列車は西に向かつて走り、着いたところは広島県の呉でした。大きな貨物船に兵員が満載されていました。空間には軍需物資を押し込んだの出帆です。関東州の大連港に入港投錨しました。大連港は大きな港で諸設備も立派で関東軍の表玄関です。南満州鉄道に乗車して、何日かしてハルピンにて下車、駅頭で各隊ごとに整列し、それぞれ現地部隊へ引率されました。

時は関東軍特別大演習の真只中でした。全軍百万人と言って対外的に威武を発揚したのです。自分達の隊号は後日知らされましたが

正式名称は、隷属・大本営―第十方面軍―第三十二軍

〔編成〕東京・第二十八師団司令部・秘匿号は豊第五六一一部隊、編成は、

歩兵第三連隊（東京）、歩兵第三十連隊（高田）、

歩兵第三十六連隊（鯖江）、騎兵第二十八連隊、

山砲兵第二十八連隊、工兵第二十八連隊、

輜重兵第二十八連隊、第二十八通信隊、

第二十八防疫給水部、第二十八兵器勤務隊、

ほかに第一、二、三、四野戦病院、病馬廠、

制毒隊、これに速射砲二個中隊でした。

要するに防疫給水部は司令部直属で、これには輜

重兵（自動車）も一個中隊が隸属していました。

秘匿号は「豊・五六五三部隊」でした。

ハルピン市内の航空軍兵営に入りました。しかし兵舎は無く、暫時、八錘形天幕での起居でした。

と言っても今まで見たことのない立派な天幕でした。中央天空に直径五〇センチの円輪があり、八本の鎖で支えられ、心柱が約五メートルから八メートル位のものでした。下辺の円辺は約五メートルから八メートル位で、八本の太い綱にて外延に引っ張り、地上一〇〇センチ位で腰幕を張っていました。

外布は冬季は保温用布を使用していました。また、夏季用の腰布は通風の良い蚊帳のようでした。

中心に達磨ストーブを焚き、冬季の氷点下三〇度でも体は暖を保持できました。大地が銅鉄のごとく氷る冬期は外綱の支え杭を打ち込むことが不可能なので、水を打って氷らせ大地に固定しました。ふと幼少の頃を思い出し、恰も野外キャンプ場にいるような気分になったものです。

初年兵の教育係は昭和十四年兵が担当だった。

軍医将校による衛生全般教育がありました。そうしている中に、空軍下士官用の兵舎が提供され、少し軍人らしき気分になりました。教育係下士官から各教科（全兵科に対する）教育を受けました。本科が歩兵であるため歩兵操典を主体に学び、衛生教典が防疫給水部としての必須科目でした。軍医中尉さんの教育は全員熱心に勉強しました。

各人自身が身体に関してのことです。身体の成り立ち、五体に対する諸構造、機能、疾病、外傷等々です。なお喀痰（かくたん胸部疾患）、検尿（性病）、

痔疾等は兵隊特有の病気だとのことでした。教育係から防疫給水の本来の任務に関して、特に水質検査を行うことが第一で、飲料水に適・不適、特に伝染病菌の有無が最大の主眼点として調査を行うことでした。

スパイの犯罪行為には要注意でした。なお検査・除去等には試薬を使用して反応を調査しました。この作業には「特別水質検査班」が行い、特殊専門教育修了者でした。濾水器は円筒にして直径五センチ、長さ七〇センチで、濾過水は必ず濁水でも清水のごとくなります。またこの濾過器には甲・乙・丙と三種類の器材がありました。基本的に多く使用したのは「乙機器」でした。

こうしてできた「清涼飲料水」を輜重隊の自動車積載タンク（二トン容量）に満載して運びました。簡単に言えば消防車の水槽のごとくで、防疫給水部には輸送運搬の自動車隊（輜重兵科）があり、何日も行動は同一でした。当時の自動車は燃料不足のために、薪炭自動車と言って、荷台の

前に立て形の釜を据えこれに薪を燃焼させて瓦斯<sup>ガス</sup>を発生させての始動でした。防疫給水部より自動車隊の方が苦勞したと思う。特に冬期は機関の凍結で難渋していました。

関東軍航空下士官養成所の兵舎が移動で空室ができ、自分達が入居することが決まりました。「甲編成兵舎」の壁の厚さ五〇センチ、窓は二重窓、天井は高く、大きなペチカがありました。この建物だったら零下五〇度でも安住できると戦友と語り合いました。

その頃に大東亜戦争が始まった？ 北満にいたためか半分呆けたか（大陸呆けと言う）。ロシア語教育だと言って「露西亜語教育通訳官」が来営しました。片言の単語を修得させられました。

昭和十七年九月に移動がありました。この頃に南方戦線へと多くの部隊が移動して行きました。自分達も出動が近いぞと戦友間で話していました。後続の新兵が陸続としてやってきました。自分達

は「関特演だ」と威張っていました。しかし私的制裁は無しでした。

第一七七部隊として確固たる編成ができました。衛生関係・防疫給水部・輜重兵（自動車）一個中隊が合同にて一兵舎に同居し、諸勤務体制が完成しました。

ハルピンは北滿の要衝で、すべての部隊は「関東軍精銳軍団の鑑となれ」でした。自分達補充兵（弱兵集団）も少しは一人前の兵隊さんとして、世間様からは見られるようでした。

昭和十九年一月の厳寒の真只中に出動、大演習（注、対ソ戦想定して）が久方ぶりにありました。滿州の敵は内に匪賊があり、外には強大なるソ連軍が牙を剥き爪を磨いている、でした。チチハル方面に出動しました。雪原の中に自動車を整然と並べて（風防にする）八推形天幕を張りましたが、前述のごとく、この天幕張りは難作業でした。

自動車も腰に抱幕を張って、機関部の下に火器

を置いて、機関の氷結防止に注意していました。自分達は松花江（大興安嶺が水源）の大河の氷の厚さ約八十センチに穴を開けて水を組み上げる作業です。防寒外套（中裏毛皮製品）に水が掛かると即氷衣となります。これが最大の注意事項でした。

各機関器具も凍結すると使用不能になります。全神経を集中して全員一丸となつての活動でした。一番の苦勞はこの冬期給水作戦でした。使用後は最後の一滴まで水分を排出しないと次の使用が不能になります。水は空気と共に人類生存上最大の必需品です。物事に直面して初めて気が付くのは遅いのです。今全人類は有形無形の物に対して感謝の念が無である。嘆かわしい時代です。

零下三〇、四〇度の演習修了で原隊へ帰営しました。「やれやれ」でした。ハルピンは良い街です。ロシア革命で帝政ロシアは壊滅し、白系ロシア人は「ウラル山脈を越え」て東方シベリアへ流され

ました。その一部の人達がハルピンの街を作ったのです。異国情緒な家並があり、彼らは親しみ深く、良き隣人だと感じました。

その後自分達は厳しい訓練・演習も無くのん気に毎日を送っていました。兵営内にては歩兵ですから銃剣術・銃撃訓練はやっておりました。

昭和十九年七月某日、緊急出動の非常呼集が発令されました。二十四時間出動です。少し以前より他部隊が、噂では南方戦線に移動している。自分達もいよいよ来るものが来たぞ、「決戦場に臨むのだ」と口では強気のことを言っていました。いざ出動となりますと何か不安な気持ちでした。それで口では「江戸っ子部隊の心意気を發揮するのだ」と啖呵を切って淫漑と出動、営門を後にしました。

満州鉄道で一路南下し、朝鮮の釜山から輸送船に乗り、同年八月に沖繩の宮古島へ上陸しました。想えば北滿の大地から遙か南海の「東経一二四度一五分北緯二四度三〇分」の宮古島です。自分達

の任務の防疫給水の任務は一切無しです。島には清らかな井戸水が充分有ったからです。島の人達とも仲良くのんびり年末を迎え、そして昭和二十年新春になりました。

新年早々から米軍機が飛来しました。偵察機が三日か四日に一回、朝夕一機で飛来してました。自分達は着任以来防空壕、たこつぼ(戦闘、迎撃用)を掘り、特に糧秣の補給が皆無であるため自給自足せよとのこととなりました。そして甘藷(さつま芋)の栽培に全力を傾注しました。当地は一年中暖かく芋の栽培には最適の地でした。苗の植え付けを行いながら一方では収穫しているという状態でした。百姓仕事も楽しきかなでした。こうして自分達のどかに芋を作っていた時に、食料も飲み水も無く、敵対しながら散って逝った戦友が多くあったのだ。そうした攻防戦を少しも知らずに自分達は宮古島にてのどかな日を送っていました。

昭和二十年四月、沖縄戦が開始となりました。

数週間前から偵察機が毎日何回も飛来し、超低空で威嚇射撃を行って去って行くようになりました。

いよいよ敵が大機動部隊で接近して来たとの無電が入りました。自分達もここが墳墓地だ。お国のために死ぬのだと思うと気分が楽になりました。差し迫った緊張感から開放されたごとく、何日でもどこからでも攻めて来いという感じでした。そして軍関係の火器や物資は全部遮蔽していました。少しでも発見されて攻撃されたら大変でした。

宮古島は沖縄本島と台湾の間にある島です。

自分達は司令部直轄で、防疫給水部、輜重隊、衛生部と総数二百五十人、小銃のみの部隊です。その銃も半数だけが所持する程度で、手榴弾を各人二発ずつ受け取っております。沖縄本島が玉砕したと知らされました。

自分が戦後知らされました沖縄戦は『六月二十二日に天皇陛下が時の首相はじめ、陸相・海相・海軍軍令部総長・陸軍参謀総長に対し「戦争終結

を速やかに実現せよ」と異例中の異例の訓示を下された』とのことでした。

そして、六月二十二日沖縄戦線では、

第六十二師団長 藤岡中将自決外〇人(石部隊)

第二十四師団長 雨宮中将自決外〇人(山部隊)

第六十三旅団長 中島中将自決外〇人

八十三日間にわたる沖縄戦は終結しました。

昭和二十年六月二十三日、沖縄地区軍司令官、牛島中将並びに長勇参謀長は共に切腹自決をされた。

六月十八日から二十三日にわたり、沖縄師範女子部・沖縄第一高等女学校生徒の「ひめゆり部隊」が戦死及び自決者多数を出しました。その他軍人・軍属・一般民衆等の戦死傷者十八万六千五百人にのぼったのです。

これに対して島の自分達は完全な無傷状態でした。豊兵団は北満の地にて北辺の護りだと頑張りました。今ここ宮古島を散華の地と思いましたが、

昭和二十年八月十五日終戦、九月三日米戦艦ミズリー号にて終戦の文書が交換されました。自分達は武装解除されました。船舶不足で移動も帰還もできず、農作業に専念して芋を作っていました。

昭和二十一年迎えの船が来ました。宮古島へ駐屯して一年十カ月です。風の便りですと東京は完全な廃虚で瓦礫の山だとか。昭和二十年三月十日にボーイングB 29が雨霞のごとく爆弾と焼夷弾を落として一般民衆を皆殺しにした、と聴かされておりました。

浦賀の港に入って復員手続きを完了しました。二日程いて「帰宅よし」となりました。一目散に住み馴れた東駒形へと空を飛ぶような気持ちで帰りました。しかし昔の面影は皆無でした。道路も家並もまるで浦島太郎の玉手箱のごとく、母と姉は三月十日の空襲で死亡していました。親父は長野県の親戚に疎開していたとか。芝の親戚にちよつとだけ厄介になり、以後現住所の横須賀です。

軍歴通算四年六カ月でした。長期間の割には苦労が少なかつたのですが、軍人で無い一般民衆が戦果に彷徨い、生命を失うようなことは絶対に二度とやってはいけません。平和は尊いものです。戦禍に斃れた多くの人の御冥福を祈ります。